佳作

祭りで知った盛岡の魅力

岩手県岩手大学教育学部附属中学校
２年　大澤　実花子

未来の私はどこに住み、何をして、どんな気持ちで生きているのだろう。さっぱり想像がつかない。自分の将来を考える時、それはいつも漠然としていて「こんなことをやってみたい」「あんな生き方がいい」という、具体的な目標があるわけではない。少し前、学校の道徳で「将来はどこで働きたいか」というテーマの授業があった。何となく岩手から近い場所が良いと思い、東北のどこかで働きたいと書いた。もしどこか遠くに住むことがあってもやっぱり盛岡は大切な場所。この夏に、改めてそう感じる出来事があった。

「さっこらちょいわやっせ」。盛岡では１年の中で４日間だけ、地元以外の人からすると意味不明で呪文のように聞こえる言葉が絶えない日がある。これは盛岡市の伝統的な祭り、盛岡さんさ踊りに出てくるかけ声の一つだ。昔、盛岡の地で人々を困らせる鬼がいたという。そこで、三ツ石神社の神様がその鬼をこらしめ、もう悪さはしないという約束として三ツ石の岩に手形を押させた。この話は岩に手で、県名「岩手」の由来とも言われている。鬼がいなくなり、喜んだ人々が舞った踊りこそがさんさ踊りの始まりとされている。さっこらは漢字で「幸呼来」と書き、幸せを願うかけ声となっている。今年はコロナ前と同じ内容での開催で、夏らしい熱気が戻ってきた。

盛岡さんさ踊り３日目の夜。浴衣や雪駄など、慣れない衣装に身を包んだ私はパレードのスタートを待っていた。周りを見渡すと、驚くほどの団体や観客でにぎわっていた。こんな人数に見られながら踊るのかと圧倒される。ニューヨークタイムズの「2023 年に行くべき 52 カ所」に選ばれたこともあってか、数年前と比べてもより多くの人が見に来ているように感じた。「見ている人たちに綺麗な踊りを見せようね。」パレードの直前に踊りで出る私や弟に母が言った言葉だ。確かにそのとおりだ。観光客は人生の中で盛岡を訪れるのは今回だけかもしれないから、その旅行が良い思い出として刻まれてほしい。地元の人にも踊りを見て良い時間を過ごしてほしい。そのために思いが伝わるような姿で踊りきろうと決意した。

いよいよパレードがスタートした。私たちの団体は伝統さんさとして「神楽くずし」を踊った。歩道に近い列で踊り、多くの視線を感じた。練習で意識したことを思い出す。指先を見る、腰を低くする、腕を上げる……。小学生の時以来だった。パレードに出るのは。さまざまな振りつけを覚えるのに必死だっ

たが、今は列をそろえ、綺麗に踊ることを考えられるようになった。
　歩道からの声援や太鼓、笛の音に後押しされ、夢中で踊っているとゴールが見えてきた。ほっと安堵したが、ゴールの後ろにも大勢の人がいるのが分かり、気が引きしまった。ようやくゴールの線を越えた。達成感でいっぱいになった。
　「盛岡は楽しい町だな」。さんさを終えて改めて思った。自然がすぐ近くにあり、人とのつながりを感じられような、静かで落ち着いた雰囲気がある一方で、行事や祭りがある時の活気に満ちあふれた明るい雰囲気もとても楽しい。もちろん、東京や大阪など、大都市と比べるとつまらないと感じる人もいると思う。もしかしたら、未来の自分も都会の華やかさや便利さに慣れてきて、良さを忘れてしまっているかもしれない。自分が過ごした町の記憶が消えてしまうのはもったいないし悲しいことだと思う。だからこそ、今の自分が盛岡での時間を大切にして、他の地域から来た人に自信を持って魅力を教えられるような人になりたい。未来の私に今の自分の思いを強要したくはないが、ずっとこの地域を大切にできるような人であってほしいと願っている。そして、盛岡の魅力の一つであるさんさに、これからも積極的に参加してほしい。私の団体には高校生でも続けている人たちがいる。また、テレビで観たさんさの特集番組では、部活動として取り組んでいる人たちもいることを知った。数十年前から受け継がれてきた伝統は、そのような人たちによってこれからも発展していくのだと思う。未来の自分にも、地域を少しでも明るくしようという心を持って、楽しみながら生活してほしい。